

# 島崎庸夫作品についての考察

調査研究係 石川 賢

## 創元展の魅力と島崎庸夫先生

昭和16年太平洋戦争勃発と時を同じくして、創元会は呱呱の声を上げた。絵画の公募団体としては、一口では語れない幾多の試練を得て現在に到っている。創元会は日展系傘下の団体でありながら、時流や流派やジャンルに左右されず、具象あり、抽象あり、非具象あり、超現実あり、ポップあり、水彩、油彩、版画、最近では日本画までが平面表現の領域として容認されている。それぞれが厳しく対峙しながら、しかし互いの平面表現の可能性を認め合いつつ、一見和気あいあいの寛容さで共存し、互いに刺激し合いながら、公募展として着実な歩みを続けている。

そんな創元会にあって島崎庸夫先生は本会の前常務理事、現副理事長として、また本会の一人の優れたリーダーとして、これまで大きな存在であり続けてきた。かつてフランスの文化相アンドレ・マルロウは、「ピカソは美の終焉」といって世界の知識人を驚かせた。しかしそれ以後も造形美術の分野は、衰退するどころかこれまで以上に、圧倒的に多様化しながら、依然としてたゆみなく進化し続けている。しかし、およそ公募展と名が付くものの多くが、会の傾向や主張の枠の中で切り盛りされ、会の色眼鏡が一種濾過紙の役目を果たすことがある。会の様式にあわない作品はすなわち入選も受賞もなしである。

その点、創元展では新鮮な作品については審査員の熱い目が注がれ、むしろ積極的に取り上げられ、作品が良ければ入選入賞の俎上にあげられる。そして逆にプラス評価を得ることが多い。世界的規準の審美眼が会の質の向上に寄与していると言っている。そんなときは特に島崎先生の審美眼や指導力に負うことが多い。

島崎先生は若干16歳(高校2年生)から創元展出品を続けている。武蔵野美大を卒業、2年後には26歳にして日展に初入選、順風満帆の日展系作家として一定の地歩を築き始めていた。35歳のとき、銀座さえぐさ画廊にて個展。時を同じくして工藤和男(現創元会理事長)、島崎庸夫、麻生蓉子、林清納、らと「翔展」を結成。

このころからシャガールやルドンに酔い、暗中摸索に明け暮れ、自問自答がはじまる。日展には青く重苦しい群像や浮遊する女等を出品。落選が続く。1977年モスクワ平和風刺画展「公園の休日」を出品。1979年ソフィアトリエンナーレ展に招待出品。1980年23回安井賞展候補入選(第16回展から計4回入選)1983年第42回創元展にて会員賞受賞「夜の軽業師」、1986年第45回創元展にて文部大臣奨励賞受賞「夜の軽業師」と。一見して明るい未来がのぞきかけたころであった。

1982年自身の絵を静かに見つめ直そうと、13回出品し続け既に日展会友でもあったが、あえて日展を離れることを決意する。先生は創元会のことを「どこの会にも見当たらない自由な雰囲気をもった会です。日展傘下でありながら、正統と異端(?)が共生し、活性している会だね。」と云っている。ご自分を異端と決めつけながら、周囲を排除する事なく、自身の思いや時流を押し付けるようなこともしない。しかし自己の作品には常に確信と自信をのぞかせる。進取の気に富み、常にクリエイティブな仕事を大事にし、創元会にあってはある意味で模範的な指導者であり、頼りがいのある慈父のような存在であり続けている。改組日展後、日展のありようも少しずつ質的変容を遂げている。日展に新風を送り込んでいるのもまた創元会である。最近では旧態依然の日展の様式美に少なからず画期的な影響を及ぼしてきていると見る。

## 気になる作品について



公園の休日 1973年 油彩・キャンバス 194.0x259.0cm

■1973年「公園の休日」200号の大作。自宅が公園の中であったので日ごろ見てきたさまざまな人間模様を群像として描いた作品である。新聞を読む老人、トウモロコシをかじる人、風船笛を吹く子供、犬を抱く女性、愛をささやくカップルもいる。男の顔は仮面であり、もしかするとご自身を演出しているのかもしれない。後ろの方で子供たちが遊具で遊んでいる。ビリジャンからパープルに背景がしだいに変化する中、子供や登場人物のパーミليونや黄色や青の衣装のコントラストとコンポジションが美しい。特にカドレッドとオレンジがアクセントになっていてある種音楽のようなハーモニーがある。島崎先生は20歳のときTBSのコンクールでシャンソンの「枯れ葉」を歌い2等賞をもらったとのこと、そう聞けばたしかにこの作品にはそんなシャンソンの底流を感じる。全体に人間が浮遊しており画家の瞑想する図が美しく漂うのが分かる。そして「公園の休日」は安井賞展の2回目の招待出品となる。



よっぱらい 1979年 油彩・キャンバス 91.0x116.7cm

■1979年「よっぱらい」不安定な酔っ払いの足取りさえ感じられる鼻眼鏡の酔っ払いの表情が見事に表現されている。横長い画面に薄紫のよれよれの上着、指にはタイピンが揺れている。憂さを晴らすように気持ち良く酔っ払う自身の願望も手伝って達者なドロウイングである。ふだんの膨大なエスキースの中から選び抜かれた一品と見る。ちなみに心理描写であることが分かるのは上着がコンプレックスカラーの紫色であることだ。この風情の中にあらゆる日常の憂さが濃縮されている。あるいはこれは大抵の男性の願望かもしれないと思うと益々愉快になる。



夜の軽業師 1986年 油彩・キャンバス 145.5x227.3cm

■1983年「夜の軽業師」は創元展で文部大臣奨励賞を受賞した作品。ピエロが片手で女性を受け止めている。宙に浮いて水平になった女性がいて口に棒をくわえてその先に青い球を載せて操っている。奥の方で仰向けになった曲芸のピエロがいる。サップグリーンやビリジャンの深い色が背景になり、下方にしびいバートアンバー、ピエロの仮面の白い顔とオレンジの衣装やパープルの女の上着が映え、これ又美しい音楽性のあるハーモニーやコンポジションそしてリズムを奏でている。女性も男性も仮面の顔で白くおしろいが塗られ背景から際立っている。そして一輪車のピエロの白黒の縞模様が両面を引き締める効果になっている。作家のもつ独特な魂のメロディーが感じられる。画面は相変わらず浮遊する人間を一見不安定な構図で捕らえているが、検証するにつけ見事にバランスが取れているのに気づく。



とむらい 1990年 油彩・キャンバス 97.0x162.0cm

■1990年「とむらい」グレーと灰褐色のからみあいの中に叫んでいる人間がいる。そして仰向けになった不思議な女性の裸体が横向きに描かれている。沖縄で自決した若い女性だという。沖縄戦跡をたずねた時のイメージで描いたものである。ゲルニカの日本版と云ったところか。色彩はモニュマンとして深く美しい。そして見る人の心象をえぐるものがある。



鳥葬 1992年 油彩・キャンバス 130.3x194.0cm

■1992年「鳥葬」鳥によって啄まれ白骨と化した死後のイメージはまさに激しいモニュマンとなっている。何れは土に返る輪廻を意識した生身の人間のたどる運命を必死に納得しようとした痛烈な表現の中にも、一種安寧と諦めがやがて見えてくる。死への悟りとも云うべき死生観の昇華ともいえる境地でもあろうか。





失われた夏 1993年 油彩・キャンバス 100.0x65.2cm

■1993年「失われた夏」60歳の作品である。強靱なフォルムと詩情。残酷な沖縄の現実に立ち向かい、画家の背負ったイメージから現れ出た母性愛の神聖なシンボルと化して、痛ましいさを越え迫るものがある。作者の死生観に変化が出てきたようにも思える。しかし女性であるだけに周囲に死後のさ迷える霊界があるようにも感じられてならない。



燻 1993年 油彩・キャンバス 72.7x91.0cm

■1993年「燻」沖縄戦末期の悲惨な出来事が下地にある。原爆の犠牲になった子供たちのイメージから取られた焰であるが、九の字に曲がり嘆きを伝えている。母親の情愛の表現が直截であるだけに、わが子の死の悲しみを乗り越えられずに苦悩しているのが分かる。しかし神に召されたわが子の死と云う現実を乗り越え、霊の安穩を祈る姿とも見える。



爆祭 1996年 油彩・キャンバス 162.0x194.0cm

■1996年「爆祭」63歳のときの作品である。ユダヤ教の神に捧げられた犠牲者のイメージを永井隆博士が、長崎の原爆で死んだ子供たちの様子を見て語ったことによる、とのことである。赤子を脇に抱えて叫ぶ女がいる。林中赤い炎に包まれ口から血が噴き出している。断末魔の苦しみが林中から伝わってくる。塗炭の苦しみの中、わが子を守ろうと必死であるが間もなく死が待っている。その臨場感にあふれるイメージを見事に表現している。背後の赤い炎のような表現はゴッダのそれを思わせる。シケイロスやスーチンや武蔵美のころの師麻生三郎までもがダブる。



闇中記 1996年 油彩・キャンバス 162.0x194.0cm

■2005年「闇中記」72歳の作品。森のシリーズの出発点といえる作品である。子供を命の象徴として捕らえ、それを抱く女と赤い衣装で挑みかかり威嚇する女。それは森を守る女と破壊しようとする女といえる。それを見守るもう2人女がいる。しだいに幼子のテーゼは進化を遂げる。そして自然破壊への警鐘となっていく。背景には、アメリカ軍のイラク侵攻による誤爆があるとも云う。ゲルニカの合わせ鏡でもある。



森の女 2008年 油彩・キャンバス 162.0x194.0cm

■2008年「森の女」シリーズ。島崎先生は鳥や動物と親しい。40歳まで高崎公園の中に自宅があって、動物園を祖父が管理していた。檻を通して動物を眺める人間達であるが、逆に檻の中から人間達を眺めた動物の仲間としてみる視線から、それを現代のエコロジーにつなげることができる。すなわち地球を一つの森と見立ててそれを破壊する者に対する抵抗が生まれ、そこから森の女シリーズがうまれてきたと思う。フクロウを抱く母親、そこにもう一人の女がささやくようにより添う。二羽のフクロウの子供は森の中の命、すべての生き物の象徴である。大きく迂回しながら島崎芸術はいま「命」のテーマへと進化しここに至っている。

人間感情の織りなす刹那を描く

「島崎庸夫展」 見る目、生きた手、感ずる心  
主催 高崎市美術館 後援 朝日新聞前橋総局他  
期間 2009・2・8（日）～ 3・29（日）より